

Sencia

ソフトパワーで
大阪のさらなる未来を輝かせよう

2017. 11

「センシア」

建築家 一般社団法人大阪青年会議所 理事長 巻頭対談「安藤忠雄×岡部倫典」

テーマ「巨匠・安藤忠雄・子どもたちに託す大阪と日本の未来」

特集「温故知新 大大阪時代を歩く」

【第6回】大阪城天守閣/大阪府庁本館/
旧大阪放送会館(NHK大阪放送局)

「探訪・浪速の名匠」世界最古の企業 株式会社金剛組

「ザ・元気人インタビュー」human noteリーダー 寺尾仁志

「この店、この一品。」きつねうどん発祥の店 宇佐美亭マツバヤ

写真: 秋晴れに映える大阪城天守閣

BAKU MATSU 150 years MEIJI ISHIN

The end of the Edo period
Osaka Castle

The Meiji Restoration
2017—2018

大阪城天守閣

〒540-0002 大阪市中央区大阪城1番1号 電話 06-6941-3044

午前9時から午後5時(最終入館は閉館の30分前まで)

入館料: 大人600円

中学生以下、大阪市在住65歳以上の方(要証明)、障がい者手帳等ご持参の方は無料

http://www.osakacastle.net/bakumatsu_ishin150/

二〇一七・一〇・八
幕末維新五〇年
大阪城天守閣

江戸幕府最後の牙城、大坂城



Junior Chamber International Osaka
一般社団法人 大阪青年会議所



建築家 安藤忠雄

一般社団法人大阪青年会議所 理事長
岡部倫典

テーマ： 「巨匠・安藤忠雄 「子どもたちに託す 大阪と日本の未来」

1969年、28歳の若さで安藤忠雄建築研究所を設立して以来、約半世紀。76歳の現在も、国内、そして世界各地を舞台に、常に現役の挑戦を続ける稀代の建築の巨人安藤忠雄氏。「目標があるうちは青春だ」と言い切り、未来へと進むその若々しい眼差しには、一点の驕りも見られない。その「世界のANDOO」が次に手掛けるプロジェクトは、大阪市と共同で中之島公園内に建てる「ことも本の森 中之島(仮称)」。2025年開催を見込む大阪万博への氏自身の期待も含め、子どもたちの世代に託す大阪と日本の未来について、本年度巻頭対談の締めくくりとして再び岡部倫典理事長と語り合っ

て頂いた。
ネット社会で「情報」は簡単に手に入る。しかし、子どもに「考える力」を与えるのは本だけ。

理事長 先生、四月の大阪JCC入会式 新人セミナーで講演頂きました節は、お忙しい中対談させて頂きまして誠に有難うございました。今日は、今年度の誌上対談の締めくくりとして、このように先生の事務所までお伺いさせて頂き大変恐縮ですが、どうぞよろしくお願い致します。

安藤氏 いや、岡部さんもお忙しい身でしょう。こちらこそ、よろしくお願いします。

理事長 有難うございます。それでは早速ですが、今回「子どもたちに託す大阪と日本の未来」というテーマでお話をお伺いさせて頂きます。これは先日、先生が京大の山中伸弥教授と記者会見で発表されました「ことも本の森 中之島(仮称)」を受けてのものです。先生自ら設計と建築を手掛けられ、完成後の運営費は寄付で募る子どもたちのための

図書館を計画されたご動機をまずお聞かせ頂けますでしょうか。

安藤氏 一つのきっかけは、鉄鋼王カーネギーの後悔に共感したのが始まりですね。彼は66歳で引退して83歳で亡くなるまで事業で築いた莫大な財産を社会のために注ぎ込むわけですが、それを十分出来なかったのが自分の失敗であると言っているんですよ。アメリカ中に図書館を創り、カーネギーメロン大学やカーネギー財団も創設した。それでも全部を社会還元のために使いきれなかったのが失敗だと。これには考えさせられましたね。

理事長 なるほど。確かに考えさせられますね。

安藤氏 そういう中で大江健三郎さんの回顧録を読む機会があったんですが、大江さんは子どもの頃に母親に読み聞かされたマーク・トウェインの「ハックルベリー・フィンの冒険」や「トム・ソーヤの冒険」に感動し、その感動が中学時代にそれらを英語の原書で読むことにつながった、それが自分の人生のスタートになった、と書いておられるんですね。その時改めて感じたのは「子どもに考える力を与えるのは本だ」ということです。

活字文化を愛する企業人たちが、未来を担う子どもたちを育成する仕組みを作りたかった。

理事長 確かにその通りですね。

安藤氏 今の時代、偏差値教育のせいで、子どもが子どもをする時間がないんですよ。自由に遊んだり、本を読んだりして、そこから自分で考える力を子どもは身に付けていくものですが、その機会が失われている。ネット検索で情報が簡単に手に入る社会ですが、本当に考える力を身に付けさせるためには本を読むことが必要です。

理事長 「子どもが子どもをする時間がない」。至言ですね。その一つが本を読む時間ということですね。

安藤氏 そうです。そこで、子どもたちのための図書館を創ろうと考えたわけです。京大の山中伸弥教授もこの考えに賛同してくださって、大阪市の吉村市長を通じて名誉館長になって頂くことになる予定です。

理事長 それは頼もしいですね。

安藤氏 大阪の子どもたちの学力レベルは、残念ながらあまり高くない。偏差値教育ではなく、本を読んで考える力をつける機会と場所を提供すること、これを少しでも上げたい。この事も別の背景としてあります。本を読むというのは、忍耐力がある作業ですから、それでも頑張つて最後まで読むと知的体力がつくわけですよ。そうすると自然に学力もついてくる。面白いことに、子どもたちの学力が上がると地価も上がるんですよ。いや、これは本当に(笑)。

理事長 なるほど。実際、親としては学力の高いところで子どもを育てたいと思いますしね。子どもの学力も地価も上がれば、大阪の将来は明るいですね(笑)。ところで、記者会見で「建築費の用途はついている」と言われていましたが。

安藤氏 6〜7億というところだと思います。まあ建築費はいいとして、完成後の運営費が必要です。そこで1社年間30万ずつ5年間支払う企業200社を募り、その寄付で運営費を賄うことを提唱しました。

理事長 最初に仰っていた企業の社会還元の仕組みですね。

安藤氏 その通りです。やはり、企業というのは社会のためのものであって、社会還元をするという務めがあると思うわけですよ。幸い、私が個人的にお話しさせて頂いた関西の財界の方々たちはすぐ賛同して下さいましたし、その他新聞社、書店、各出版社までも手を挙げて来てくれました。皆さん、活字文化が大事だと思っているわけです。そういう企業人たちが、我々の世代に続いて大阪と日本の未来を担う子どもたちを育成する仕組みがこれで整ったと思います。

私の仕事のエネルギーは「誇り」。子どもたちが誇れる大阪の街を残していきたい。

理事長 先生ご自身、独立された頃に読まれたルコルジェの本から大きな影響を受けられたと、ご著書に書いておられました。本物の本との出会いは人生に大きなインパクトを与えますね。

安藤氏 それは間違いないです。私は他にも20代



の頃に和辻哲郎の「古寺巡礼」を読んで、「よし、和辻哲郎が歩んだ通りの道を歩こう」と思い、インドに行きました。ヨーロッパに行った時は、ミケランジェロの彫刻を彼が作った年代順に見て回りました。良い本との出会いはそういう発想を与えてくれます。

理事長 私もいろいろ本は読みますが、読んだ内容が直ぐに何かの役には立たなくても、それが知的資産となつて積み上がつてきているのは実感します。

安藤氏 本を読める環境に育つというのは恵まれたことなんですよ。私は下町の森小路で育ちましたから、当時は子どもが読める本などは周りになかったんですね。本などは読まずに外を走り回って、魚釣り、野球、それから喧嘩もよくしました。しかし喧嘩というのは、全身全霊を使つて考えますから、考える力がつくわけですよ(笑)。それと闘争心も。今の子どもたちにはいい意味の闘争心が無いですが、自分の力で立ち向かつていくエネルギーを得るためにも、本を読んで考える力を身に付けてもらいたいと思いますね。

理事長 先生は先日の記者会見で、「本を読んで誇りある子どもを育てたい」とも仰つておられました。

安藤氏 これはですね、私の仕事のエネルギーの源泉は「誇り」なんです。御堂筋や中央公会堂という素晴らしい財産を残した大阪という街に生まれ育つたという誇り。これが私が大阪で仕事を続けている理由なんです。大阪は、手塚治虫という素晴らしい人材も生み出しました。私も手塚さんの作品はずいぶん読みましたが、一方で「鉄腕アトム」を生み出し、もう一方で「ジャングル大帝」を描く。この発想は体どこから来るのかと思いました。手塚さんは阪大医学部出身で人間の体を知っている。人間の体という現実を踏まえて想像するサイエンストです。御堂筋を生み出し、こういう人を生み出した大阪という街を将来も子どもたちが誇れるようにと、大阪の誇る中之島にこの子ども図書館を建てようと考えたわけです。

知的好奇心が新しい可能性を生む。二度目の万博は、モノからコトへ。

理事長 さて、いよいよ来年秋に2025年に二度目の開催を目指す大阪万博の可否が決定します。55年ぶりのこの万博に先生は何を期待されておられますか。

安藤氏 一言で言えば、経済力ではない大阪の世界からの信用獲得の場となつて欲しい、ということです。

理事長 経済力ではない信用、ですか。それは私も同感です。テーマも「いのち輝く未来社会のデザイン」ということで、健康が大きな要素です。

安藤氏 私が最近感じるのは、日本人の「好奇心」

が衰えてきているということです。戦後、物質的には何もかも失った日本を建て直そうと、人も企業も頑張った。あらゆるモノに対する好奇心があり、日本の経済力は急速に立ち直り、1964年には東京オリンピックが開かれました。しかし、この頃から実は好奇心は衰えてきていると私は思っています。そして今はもう物質的なものへの好奇心は満たされてしまっています。

理事長 私もそう感じます。70年万博は大成功しましたが、それは大阪と日本の経済力に対する信用づくりの場だったということでしょうか？

安藤氏 そういうことです。しかし、今は大阪の経済を誇つたところで、それは世界の信用にはならない。経済力が信用になる時代ではないわけです。しかし、IPSの山中伸弥教授を生んだ大阪は世界の信用につながる。そういう意味でも新しい可能性を生み出す知的好奇心は大切です。

理事長 なるほど。モノからコトへ、ということですね。



安藤氏 そうです。健康というテーマも、医学によつて支えられる健康も大事ですが、一方で環境やライフスタイル、知的好奇心によつて人間自ら生み出し維持する健康も大事です。ですから今度の大阪万博は、生命や地球のことも含め人間の未来の生き方に対する可能性を示す場となり、そういう未来を提唱する大阪の知的創造力を世界が信用する場となるべきだと思います。

理事長 全く同感です。大阪JICも2025年万博に向け、大学生と若手起業家が絡になって、社会に山積する課題の解決に向けたビジネスモデルの構築に取り組む「Global Academy Osaka」という事業や、様々な仕事のプロフェッショナルが大阪市内の小学校の教壇に立つて子どもたちを教える「社会人講師事業」を通して、そういう大阪の知的創造力の向上に取り組んでいます。

安藤氏 JICの皆さんには期待していますよ。是非子どもたちのためにも頑張ってください。

プロフェッションが人の信用。体力の続く限り、挑戦はやめない。

理事長 有難うございます。頑張ります。さて最後になりましたが、今、国立新美術館開館10周年記念で開催中の「安藤忠雄展 挑戦」で、「目標があるうちは青春だ」と仰つておられますね。

安藤氏 目標は常に持っていますよ。この展覧会では当初10万人入場を目標に掲げて、私の作品の「光の教会を実物大で会場に再現しました。しかも、今回は十字部分にガラスを入れていません。元々私は実物でもそうしかつたんですが、できませんでした。今回これで、「あきらめない」というこ



マチミラOSAKA 2017での大阪万博2025パネルディスカッション



大阪府知事の松井一郎氏と握手を交わす岡部倫典大阪青年会議所理事長



とを見せたかったんです。それともう一点は、大阪人の誇りと大胆さも示したかった。おかげで来場者数もかなり増えているようで、会期中に20万人にも届く勢いです。

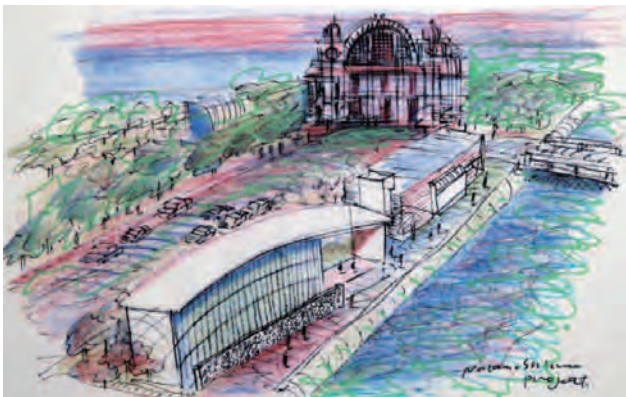
理事長 まさに挑戦の成果ですね。

安藤氏 私は体力が続く限りは、挑戦はやめません。その昔、U2のボノが私の事務所に訪ねて来たので、光の教会に案内したら、そこで彼は「アメイジング・グレイス」を歌いました。私はその歌の上手さに感動しました。それ以来の付き合いですが、人はその人のプロフェッションでその人を信用するものです。私のプロフェッションもまだまだ終わる訳にはいきません(笑)。

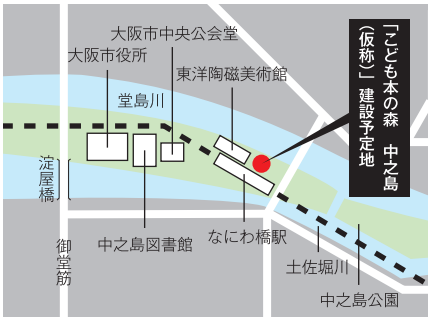
理事長 今日はお忙しい中、先生のお話から再び大変な激励と元気を頂戴しました。これからもうぞご指導よろしくお願い致します。今日は大変有難うございました。

「本を読んで誇りある子どもを育てたい」

安藤忠雄氏が設計、大阪市に寄贈する「こども本の森 中之島(仮称)」概要



「こども本の森 中之島」完成予想図(安藤忠雄建築研究所提供)



大阪市出身の世界的建築家で東京大学特別栄誉教授の安藤忠雄氏は、去る9月19日(火)、大阪市役所に記者会見を開き、自ら設計し大阪に寄贈する児童向け図書館「こども本の森 中之島(仮称)」を発表されました。

建設予定地は、中之島公園内・市立東洋陶磁美術館の東に隣接する市が管理する敷地。施設は鉄筋コンクリート造り3階建て、延べ床面積約1,000平方メートルを予定。3層の大きな吹き抜けを囲う壁一面に本棚を設置し、子どもたちが自由に本を手にし、楽しめる空間を計画されています。予定では2019年(平成31年)の夏休みまでに完成させる見込みです。

記者会見には、構想に賛同される京都大学IPS細胞研究所所長の山中伸弥教授も同席されました。山中教授は、大阪市の吉村洋文市長の要請を受けて名誉館長の就任をご検討頂いています。

対談でも話されたように、安藤氏は未来の大阪と日本を創っていく子どもたちの世代の教育の重要性に深い関心を払っておられ、子どもたちが自由にのびのびと育つ知的環境の整備に積極的に取り組んでおられます。「本を読んで誇りある子どもを育てたい」と語られ、自ら設計・寄贈し、またその運営費を企業の寄付で賄っていく仕組みづくりを提唱しつつ率先して大阪の街づくりに貢献される安藤氏に見倣って、大阪青年会議所も種々のボランティア事業を通して未来の子どもたちの健全な育成のために引き続き励んでまいります。

大阪青年会議所の大阪万博2025支援事業



大阪青年会議所では、2025年の開催を目指して大阪府が誘致活動を展開する「OSAKA-KANSAI/JAPAN EXPO 2025」の支援イベントとして、去る9月2日(土)、3日(日)の2日間、グランフロント大阪に隣接する北ヤードで開催した「マチミラOSAKA2017」において、大阪府知事の松井一郎氏をゲストにお招きし、大阪青年会議所岡部倫典理事長とのパネルディスカッションを行いました。

また、2日間のイベント期間中、大阪万博2025の協力の一環として、誘致署名活動のブースを展開し、多くの方々の署名を頂きました。同時に、青年経済人が所属する一般社団法人として、広く企業の万博誘致協賛の呼びかけを行っております。

この他にも、大阪青年会議所の事業の一環として、大学生と若手起業家が一体となって社会に山積する課題の解決に向けたビジネスモデルの構築に取り組む「Global Academy Osaka」事業を通じて、世界を舞台に活躍するグローバルリーダーシップあふれる人財創出に寄与することにより、大阪万博誘致に向けた社会的な取り組みを展開しています。



秋空を背景に秀麗な外観を見せる大阪城天守閣

イデntyティを渴望していたのだと思います。置き忘れてきた日本らしさや郷土大阪を愛する心、この地に生きた誇りを抱くための仕掛けが必要だった。関市長はそう強く考えたのでしょ」と語るのは、大阪城天守閣 研究副主幹、宮本裕次氏。学芸員として長年大阪城天守閣を支えてきた。

万円に到達し、1930年（昭和5）着工に漕ぎつける。小さな子供でもお小遣いで貢献できる、公費を使わず市民一人一人がお金を出すことで、地域に根ざした復興事業となった。

太閤秀吉の天守閣を 近代建築で復興する。

大阪城天守閣の復興には、構想段階から二つの命題が課せられていた。一つは、徳川時代ではなく、大阪人にとって愛着の深い太閤秀吉が建てた豊臣時代の天守閣を復興すること。構造や意匠の検討は大阪市土木局建築課が担当し、また京

もう一つの命題は、記念碑的存在として、永久に残る建造物にすることであった。当時の日本は関東大震災の喪失感にまだ包まれており、建造物には地震や火災に強い堅牢さが何よりも要求された。古典建築でありながら永久建築であるという、相反する二つの命題を両立させるために技術者たちは悩み、熱く議論を闘わせたという。

隆々たる姿の金の鯱



鉄骨鉄筋コンクリート造で地上から55メートル、5層8階からなる当時の英知が集結した近代建築の誕生であった。ちなみにこの5層8階についてはこんな話がある。『大坂夏の陣図屏風』に描かれた天守は5層だが、8階だったという有力な文献もあり、内部構造をどうするか問題となった。1階部分は石垣（天守台）の内側だったとしても、「史実通り」を貫くためには残り7階分を5層の中に納める必要がある。そこで、5、6階部分吹き抜けにし、5層8階という構造を実現した。

大阪城天守閣研究副主幹 宮本裕次氏



（上）大阪府庁本館／（下）大阪放送会館（昭和11～12年頃）※写真提供：NHK

温故知新

「大大阪時代」を歩く

【第6回】大阪城天守閣／大阪府庁舎本館／旧大阪放送会館

1931年、悲願の大阪城天守閣再建。
それは大阪市民からの寄付150万円を集めて成し遂げられた、
大大阪時代最高潮を象徴する一大事業であった。

大阪のシンボル、大阪城の天守閣がそびえる大阪城公園。大阪城と向き合うように主要公共施設が建ち並ぶ大手前エリア。今も昔も大阪の中心であり続けるこの地には、大大阪時代の名残が感じられる。大大阪時代の足跡を辿る旅も今号が最終回。大大阪の中枢を担った地の歴史を紐解きながら、未来の大阪について考える。

戦国時代から江戸、明治へ、 刻まれた動乱の歴史。

スマートフォンで記念撮影をする外国人観光客たち、制服姿の修学旅行生、遠足にやってきた愛らしい幼稚園児など、たくさんの人で賑わう秋晴れの大阪城公園。彼らのお目当ては、天に向かつてそびえる大阪城天守閣だ。白亜の壁に映える緑青色の屋根、上層部には雄々しい虎のレリーフが施され、近づくほどその壮大さに圧倒される。ところで、この美しい天守閣、昭和6年に建てられた「近代建築」であることを知っている人は、果たしてどれくらいいるだろうか。

大坂城は1583年（天正11）、豊臣秀吉が天下人の居城にふさわしい大城郭を

めざして築造を開始。しかし秀吉没後、政権は徳川家に移り、1615年（元和元）の大坂夏の陣で炎上する。1620年に始まる徳川幕府の再築工事によって二代目天守が1626年（寛永3）に完成したが、1665年（寛文5）に落雷のため焼失。それ以後、大坂城は天守閣のない時代が長く続き、明治以降は陸軍用地として使われた。

大阪人のルーツを、 生きた誇りを取り戻す。

三代目天守閣の復興計画が打ち上がったのは1928年（昭和3）のこと。人口で当時の東京市を上回り、名実共に「大大阪時代」と呼ばれた時代であった。それに先立つ1925年（大正14）に開かれた「大阪記念博覧会」では、天守台に建てられた展示施設「豊公館」で秀吉ゆかりの美術工芸品や歴史資料を展示したところ、2ヵ月半の会期中に約70万人が押し寄せていた。こうした実績も意識したのだろう、大阪市長の関氏は昭和天皇即位の御大札記念事業として、大阪城天守閣の復興と大阪城の記念公園化を提案する。ヨーロッパの都市計画に造詣の深かった関市長は、市民が憩い、地元に対する誇りを体感できる場の必要性を感じていたのだ。

「急激な近代化の中、大阪の人々はア

ていた。天守閣復興でも、そうした大
阪時代の熱気や情熱が後押ししてい
たのかもしれない。

宮本氏に案内していただき、実際に天
守閣に上つてみた。天守閣は博物館施設
であり、数々の貴重な歴史資料が保管・
展示されている。中央には1階から8階
まで二重らせん式の階段が設けられて
おり、上る人と下る人がぶつからないよ
う工夫されている。これは、当時から展
示施設をめざしたことを示す画期的な
設計だった。その階段の周囲には、4、5
メートル間隔で太い柱が建つ。木造建築
の知恵をそのまま鉄骨に置き換えてい
ることが伺える。

その雄姿は戦後の大阪に 生きる勇気をもたらした。



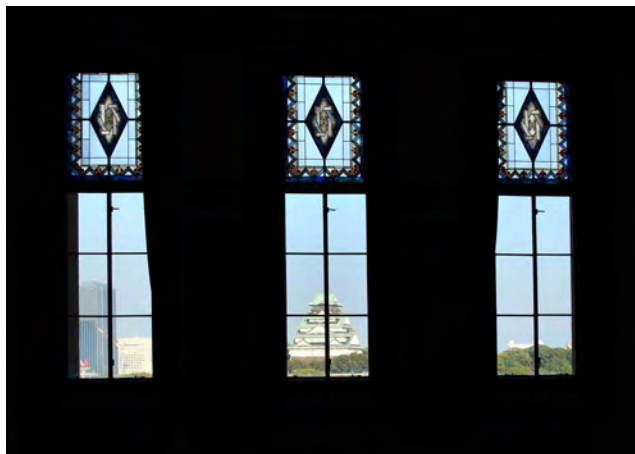
大坂夏の陣図屏風の解説に見入る来館者

その後、第二次世界大戦が起こり、大
阪城帯は大戦末期の空襲で大きな損
害をこう
むつたが、
大阪城天
守閣は幸
運にも燃
えなかつ
た。宮本
氏はその
意味につ
いてこう述



庁舎整備課の石塚なぎさ氏

二人の感
性は20世
紀初頭の
ヨーロッパ
で広まっ
ていた「セ
ッション」
と呼ばれ
る新しい潮流を取り入れた。「当時の庁
舎としてはシンプルな外観でしたが、か
えてそれが新鮮だったのでしょう。鉄筋
コンクリート構造を取り入れたモダンズ
ム建築の先駆けとなりました」と、大阪
府総務部庁舎室庁舎整備課の石塚なぎ
さ氏は語る。



正庁の間の窓からは大阪城が見える



上りと下りが分かれた二重らせん式階段

る。「大阪
は焼け野
原となり
ましたが、
焼け出さ
れた人々
や復員兵
たちにとっ
て、変わり
果てた街
の向こう
に見える天守閣がどれだけ励みになった
ことでしょう。『大阪城が見える、ああ、
がんばらなあかん』と、人々は勇気を
奮い立たせ、大阪の戦後復興に力を尽く
したのです。そういう意味でも永久建築
をめざした大阪城天守閣の復興は価値
のある事業だったと思います」

1995年(平成7)から97年にかけて
天守閣は「平成の大改修」が行われ、さら
に進化を遂げている。ここ数年はアジアを
中心とする外国からの観光客が多く訪
れるようになり、昨年度の入館者数はこ
れまでの年度最多記録を更新する25
5万人。今年9月には86年前の開館から
の入館者が累計1億人に達した。

今年と来年は、幕末から明治への転換
期から150年の節目にあたる。大阪城
は、最後の将軍徳川慶喜が活躍した舞台
でもあった。「ここは秀吉の時代から、さ
まざまな歴史が積み重なっている場所。

の装飾を排し、直線美の映える幾何学的
な外観に。そのシンプルさとは対照的に、
車寄せから建物の中へ步入ると、壮麗な
空気へと一変する。要人たちを出迎えて
きた中央のホールは3層吹き抜けて、正
面に大階段を配したスケール感のある荘
厳な空間。薄桃色のイタリア産大理石が
ふんだんに用いられ、映画やドラマのロケ
地としても度々使われてきた。

2、3階には二層吹き抜けの議場が当
時のまま残されており、都道府県庁舎の
中では現役最古の議場となっている。「戦
時中は襲撃を防ぐために屋上にコンク
リートの耐弾層を設置したり、府庁舎を
上からネットをかけて目隠ししよう、と
いう案も出たそうです。府庁舎はそれだ
け重要な建物だったでしょう」と石塚
氏は言う。

大正ロマンの美しさを 見事に復元した正庁の間。

大大阪時代の豊かな感性を伺い知る
ことができるのは、5、6階に設けられた
正庁の間である。年末年始の行事や人事
発令などを執り行う特別な部屋だった
が、庁舎が手狭になったため数年前まで
執務室として使われていた。内装の劣化
が進んでいたが、2011年(平成23)の
改修工事によって大大阪の栄華を偲ぶ空
間が見事に復元されている。

どんなに高いビルが建つても大阪城の重み
や厚みは変わらず、これからも大阪市民
の心のより所であり続けるでしょう。そ
の価値を掘り起し、発信していくことが、
私たちの使命だと思っています」と宮本
氏。大大阪時代に大阪人の誇りをかけて
建設された三代目大阪城天守閣。これか
ら、大阪人のアイデンティティの象徴で
あり続けるに違いない。

モダンズム建築の先駆け、 大阪府庁本館へ。

大阪城を後にして、大阪城公園の西に



大阪府庁本館正庁の間

面する上町筋へと下る。ここに、大大阪時
代の貴重な建築がある。1926年(大
正15)に建てられた大阪府庁本館であ
る。現在の本館は府庁舎としては三代目
で、1874年(明治7)に建てられた江
之子島の二代目庁舎が手狭になったこと
から、陸軍から払い下げを受けたこの地
に建設された。

設計はコンペにより平林金吾と岡本
馨という若手コンビの設計案が採用され
る。それまでの都道府県庁舎は中央に
塔やドームを戴く西洋の古典様式など、
行政府としての威厳を強調する荘厳な
デザインが主だった。そうした中で、若い



正面玄関から入ると3層吹き抜けの壮麗な中央ホールが出迎える

瞬間、その美し
さや空間に皆
さん驚かれま
す。その様子を
見ていると、あ
あこの建物を
残して良かった
なと改めて思
いますね」。戦後
復興期におけ
る大阪府政の
中枢を担った三
代目大阪府庁
本館。全国で
もっとも歴史の
古い現役庁舎
は現代の技術
により免震化され、当時の栄華を静かに
語り伝えている。

大大阪の情報拠点だった、 大阪放送会館。

大阪府庁舎本館の車寄せから南へ、大
阪府警本部を越えると大阪放送会館が
突如として現れる。1350年余りの歴
史を刻む難波宮跡に大阪市の大阪歴史
博物館と共同で建設された複合施設
で、関西の多様な文化・芸能を発信する
「NHK大阪ホール」や公開放送や放送
体験が楽しめる「BKプラザ」を有する

関西の情報発信拠点である。

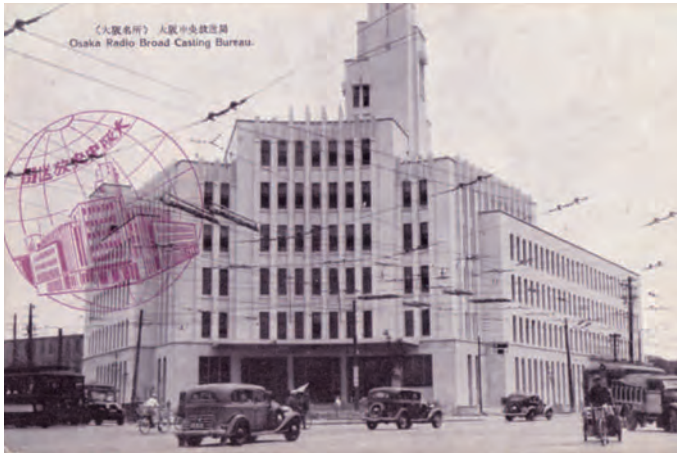
そこから馬場町の交差点を挟んだ向かい側の角に、かつて旧大阪放送会館があった。2001年(平成13)に現在の大阪放送会館が完成するまで、60年以上に渡り、関西の情報拠点として激動の時代をくぐり抜けた大大阪を代表する近代建築である。設計は東京国立博物館を設計したことで知られる渡辺仁設計事務所の渡辺仁、構造設計は東京タワーや通天閣を設計した内藤多伸。施工は大林組が担当した。建設にあたり、何よりもこだわったのがスタジオの音響効果と外部の騒音を完全に遮断することだった。特に防音は建物の北側と西側に路面電車が走っていたためだ。渡辺は騒音を遮断するべく、電車道とスタジオの間に事務室棟を挟む斬新なデザインを設計。俯瞰するとまるで鳥が翼を広げたような形をしていた。

市民の声を受けとめる「耳」のような外観。

「旧大阪放送会館はそれは重厚な建物でレトロな雰囲気でした。廊下は大理石で広いロビーがあり、今思えば貴重な建物で仕事をしていたのですね。当時は仕事に追われて、そんなことを感じる暇もありませんでした」と、大阪放送局編成部の伊藤安恵氏は当時を振り返

る。スタジオは大小13室あり、中でも1階から3階を吹き抜けにしたラジオ第一スタジオは庄巻のスケールだったという。建物の外観は垂直線の特徴としたネオゴシック様式、正面は半円形にくぼませながらも威厳のある姿をしており、まるで市民の声を受けとめる耳のようだった。「白聖の殿堂」と呼ばれた本館に移った職員達は、見学に訪れる市民の対応に追われながら「放送局に働く誇り」を覚えたという。こうして旧大阪放送局は大阪の新名所となった。

しかし、この白聖の殿堂にも戦時体制の影がしのびよる。第二次世界大戦が始まると株式や市場が閉鎖され、商都大阪の光彩は日に日に失われていった。統制



旧大阪放送会館絵葉書 ※橋爪紳也コレクション

の強化で放送は戦時色が濃くなり、大阪放送局も独自の地域番組を制作する余地が狭められていったという。やがて日本は終戦を迎え、時代は戦後から高度成長期へと進んでいく。東海道新幹線の開通や大阪万国博覧会の開催など、旧大阪放送会館は大阪の発展と活気にあふれる街の様子を伝え続けた。

1995年(平成7)には阪神大震災が発生。三十万人が被災し、十万棟の建物が損壊する甚大な被害となる。そうした中で、大阪放送局はこれまで蓄積してきたノウハウをフル回転させ、被災者に多角的に情報提供を行った。大正時代に誕生した旧大阪放送会館は昭和から平成へと、時代の変遷に揉まれながら激動の時代をくぐり抜けたのだった。



大阪放送局第1副調整室(昭和11年頃) ※写真提供: NHK

歴史あるこの地から大阪の活性化に貢献。

2001年(平成13)に現在の大阪放送会館が新設され、その役目は新館へと引き継がれた。引き続きこの地で情報を発信していくことの意義について、広報部副部長の藤田浩之氏に伺った。「歴史あるこの地にあつて、これからも魅力あふれる大阪や関西の活性化に向けて、より親しまれる多彩で質の高い放送・サービスを展開したいと考えています」。地域の課題、地方自治の動向などを的確にとらえたニュース番組を提供す



今は駐車場となっている旧大阪放送会館跡地

るほか、大阪や関西の貴重なコンテンツ素材を生かして、スーパーハイビジョンやインターネットなどのサービスもいっそう充実させていくという。さらに、地域の安全・安心の確保を担うべく、大規模災害発生時の災害報道はもちろん、首都直下地震に備え、本部バックアップ機能の運用・実施体制の一層の強化を図っていく。

ラジオが家庭に普及する前、大阪各地にラジオ塔が建てられた。市民はラジオ塔のそばに集まり、アナウンサーの声や音楽に耳を傾けた。その一つが今も大阪城公園内に残っていると聞き、案内していただいた。大阪城の外堀を背に静かにたたずむラジオ塔の姿に、社会やメディアの変遷を思う。「この下でみんな

ラジオを聞いていた時代があった。やがてテレビになり、カラー化、衛星放送、ハイビジョン放送と大きく進化した。その進化の象徴が、旧大阪放送会館だったのではないかと思います」と語る編成部副部長藤井康人氏の言葉が、この取材を締めくくるものとなった。



特別連載企画 温故知新 「大大阪時代」を歩く

〈結びに〉
大大阪を支えた民の力で、
再び大阪を輝かそう。

第一回のダイビル本館に始まり、御堂筋、通天閣、梅田、難波、そして大阪城と、六回に渡り大大阪時代の足跡を辿ってきた。大阪が名実共に日本の経済・文化の中心となった大大阪時代、もし東京や名古屋であったなら、果たしてこれほどの盛り上がりを見せただろうか。大阪を大大阪たらしめたのは、大阪の産業や街づくりを支えてきた「民」の力に他ならない。官の音頭取りに民が呼応しつつ、逆にその官をも動かし引っ張っていく民の熱いエネルギーこそが、大阪が大大阪へと大きく発展したエネルギーの本質だった。その創造性や活力は今を生

きる大阪市民に脈々と受け継がれていることに、今日改めて気づかされる。

かつて首都になるほどのポテンシャルを秘めていた大阪が再びあの時代のうねりのような大いなる活力を取り戻し、地方を、日本全体を率いていく存在になれば、日本はさらに面白い国へと発展していくに違いない。「故きを温ねて新しきを知る」。熱いエネルギーに満ちあふれていた大大阪時代に倣い、新たななる激動の未来に向かって、我々の手でもう一度この大阪を輝かせていこうではないか。

橋爪紳也・編 新書判
だい おお さか

「大大阪の時代を歩く」

大正～戦前大阪はこんなにすごかった！

かつて大阪には、「大大阪」と呼ばれた時代があった…

総人口203万人は東京を凌ぎ世界6位、「東洋一の商工都市」と謳われた工業都市化、御堂筋を始めとする「格」と「美」を備えた都市計画、世界最先端の文化を集めた情報発信地。世界に冠たるメトロポリス「大大阪」の歴史と痕跡をたどる！

<本件に関するお問い合わせ> 株式会社洋泉社 (<http://www.yosensha.co.jp/>) TEL 03-5259-0251 FAX 03-5259-0254

好評
発売中

定価: 本体
800円+税



国際都市 大阪と 復興天守

※画像提供: 橋爪紳也コレクション

「大大阪」の時代、人々の視線は世界に向けられた。

ニューヨーク、ロンドン、シカゴ、ベルリンなどに学びつつ、最新の大都市機能が導入された。木津川尻には国際路線が、発着する大阪飛行場を開設、太平洋航路による国際観光客の増加もあり、官民による国際ホテルの整備が具体化する。

いつぼつで世界を意識するがゆえに、大阪の固有性、歴史や文化を再評価する気運も高まった。

1 興亜観光と大阪の印象

雑誌『大大阪』昭和14年4月号は「興亜都市観光」の特集を組む。

海外や外地からの旅行者をいかに受け入れるのか、逆に大阪の人たちはいかに海外の諸都市を観光するべきか。相互の視点を持ちつつ、「都市観光」が多彩に論じられた。

「観光大阪の印象」と題する記事が面白い。東京在住の著名人24名に、土産物・旅館ホテル・歌舞芸・歓楽街・料理および料理店・観光案内・百貨店の各項目について、大阪の評価を求めたアンケート報告である。

たとえば政治家の芦田均は「観光都市としての大阪は多数の客に失望を与える」と批判的だ。海外からの旅行者に対しては「日本工業の威力を示す様な場所」、すなわち基幹的な工場を組織的に見せよと希望する。大阪は「観光都市」ではなく、あくまでも「産業都市」であるべきだという主張である。

対して観光客の目から、街の風情を讀める意見もある。作家の櫻井忠温は、横丁や路地が懐かしいと賞める。俳人の臼田亞浪は、道頓堀千日前天王寺はそれぞれに特色があり、宗右衛門町は京都の祇園と同様に「東京には見られない情緒」だとみる。ただ道頓堀や土佐堀川など

「異臭あふるるドブ河」は、なんとかして欲しいと辛口である。

総じて評価が高いのが、食に関する項目である。洋画家の東郷青児は「大阪に行く楽しみ最大のものは料理と酒」と強調、「つる」「伊勢はん」「アラスカ」

などの店名を列記する。作詞家の長田幹彦は「大阪の料理人諸君はとにかく非常に良心的」と分析、さらに「味の濃やかさが天下一品であり、またその味を楽しむ「大阪人の味覚」を褒める。いっぽう作家の沖野岩三郎は、大鉄百貨店内で食事した際に35銭で腹杯になった経験を紹介しつつ、味に加えて値段の安さに注目する。いずれも今日に通じる大阪の印象記ではないか。

2 「大大阪」の床飾

昭和6年11月7日、真新しい文化施設である大阪城天守閣が完成する。かつてあった建物を再現したものではなく、限られた資料から擬似的かつ近代的な和風様式が産み出された。「復元天守」ではなく、「復興天守」と呼ばれるゆえんである。

この画期的なアイデアを誰が思いついたのか。雑誌『大大阪』昭和13年7月号に市立美術館嘱託であつた上田令吉の回顧がある。それによれば大正10年頃、市役所のある職員が、外観を「豊公当時の大阪城」に模し、内部を「美術品や古美術品、郷土資料の陳列場」とするミュージアムを建設したら良いと思いついた。豊公の昔をしのぶ教育施設であるとともに、「近代文化に躍動する工業都市」を一望できる展望台を兼ねるアイデアである。

竣工すれば、大阪の「第二の名所」となる。加えて都市の「裝飾物」にもなる。家庭でも床の間に置物を飾るのが常だ。客をもてなしつつ、主人も「優雅なる気分」を味わうことができる。創案者は「大阪を代表する裝飾物」があつても贅沢ではないと考えたのだという。



この提案が、第七代市長となる関に進言されたい。アイデアは昭和3年に進展をみる。即位大札を記念する大阪城公園の整備計画に、天守復興案が盛り込まれたのだ。

永久的なモニュメントとし、後世に最高の建物を残すべく、当時の最新の建築工法が採用されることになった。建設費用は市民の寄付を集めてまかなうこととされたが、不況のただなかにあつたため、一部に「無用論」もあつた。しかし「共同的床飾」を望む市民の想いは強かった。半年ほどのあいだに、総計7万8千件を超える基金が集まった。

当初、託された使命があるがゆえに、今日においても復興天守は、大阪の「共同的床飾」であり続けている。世界的にも前例のない施設を具体化する実行力を、私たちも見習うべきであらう。



橋爪紳也 はしづめしんや
大阪府立大学
大学院経済学研究科 教授
観光産業戦略研究 所長

この店、この一品。

「第6回」うさみ亭マツバヤ

元祖 きつねうどん



戦

前は家具問屋、戦後は繊維問屋が軒を連ねた大阪船場の井池筋。かつて賑わいを見せた商人の町には今、飲食店が建ち並び、買い物客やビジネスマン御用達となっている。そんな移ろつた町中にあつて、昔と変わらぬ味と佇まいを守っているのが、1893年（明治26）に創業した「きつねうどん」発祥の店、「うさみ亭マツバヤ」である。

そもそもきつねうどんは、初代の宇佐美太郎氏が「寿司にいならずしがあるのだから、うどんにおあげさんを使つても不思議ではない」と、すうどんに甘辛く炊き上げたおあげさんを添えて出したのがはじめ



穏やかな語り口の宇佐美芳宏さん。



親子三人で代々の暖簾を守る。

り。「そのうち、お客さんがうどんの中におあげさんを入れて一緒に食べるようになったので、うどんに乗せて出すようになったんです」と、三代目当主の宇佐美芳宏さんは話す。当初「こんこんうどん」と呼ばれた新メニューは、たちまち大ヒット。いつしか「きつねうどん」と親しまれるようになり、大阪のみならず全国でうどんの定番となった。明治の人々の胃袋をつかんだその味は、平成の今も健在。「安くてうまいけど、ややこしいものは使わない」と、初代が選りすぐった素材を使い、元祖の味を守っている。たとえばカツオ節は、室での保存と天日干しを繰り返して1年かけてつくられたものを使い、醤油は麹菌が生きている旨みのあるものだけを取り寄せる。また、調理法も代々受け継がれた行程を踏襲。だしに使うカツオ節は毎朝自ら削り、おあげさんは朝晩火を入れ3日かけて味をしみ込ませるといった具合だ。注文後、ものの数分で供されるファストフードでありながら、その舞台裏では懐石料理さながらの長い時間と手



おあげさんは3日かけて作る。

問ひまがかけられているのだ。うどんの上で湯気立つおあげさんを口に含むと、ジワツとにじみ出る甘辛い味わいに、心がホツと温まる。ユズの香り、うどんのほどよいコシ、そして旨みたっぷりの優しいだしも、なんともいえない品がある。食にウルサイ大阪人に、100年以上にわたって愛されるゆえんである。



長男の聖司さん(左)、奥さんの洋子さんと。



これぞ、「元祖」きつねうどん。



大阪うどん処
うさみ亭マツバヤ
大阪市中央区南船場3-8-1
電話番号: 06-6251-3339
営業時間: 月～木曜 11:00～19:00LO
(金・土曜 11:30LO)
定休日: 日曜・祝日



西暦578年、飛鳥時代に創業した金剛組。長い歴史の中で時代の変化に翻弄されながらも、社寺の建築技術を連綿と受け継いできました。その匠の技は今、日本の伝統美・伝統文化へと昇華し、日本のみならず海外の人々の心をも動かしています。最終回となる今回は、金剛組の歴史と担ってきた役割、今後の展望について刀根健一社長にお話を伺いました。



柱と桁の組み方は巧緻を極める

西洋の技師が 感服した伝統技法

は四天王寺に直談判し、受注に至りました。金堂建築にあたって金剛組は、初めてコンクリート工法を採用しましたが、見事完成させることができたのは、五重塔を手がけた大手建築会社にご指導いただいたおかげだと聞かれています。

金剛組の職人は全員、高い技術を持っていますが、特に金剛組と一心同体である8組の宮大工「匠会」が持つ技は卓越しています。設計精度の高さはもちろん、釘や金物に頼らない継手・仕口加工の技は、海外の大工には真似できない世界に誇れる技術です。また、道具の扱いにも秀でており、なかでも鉋の技術は、数ミクロンの薄さでかけられるほど優れています。

建てる前に現寸図を引き、寸分の狂いもなく部材をつくるやり方



建築中の社寺の精巧な1/10スケールの模型

組は材そのものを削ったり「そり」をつけるなどして曲面をつくっていたからです。この工法は決して簡単なものではありませんが、曲線は社寺様式の象徴であり、日本の伝統

聖徳太子に招かれ 四天王寺を建立

金剛組の始まりは、今から約1440年前のこと。当時、日本最初の官寺、四天王寺の建立にあたって3人の工匠が百済から日本に招聘されました。その頃の日本の住居は竪穴式が主流で、本格的な寺院を建てられる技術者がいなかったため、仏教の先進国百済より技術者を呼び寄せたのです。そのうちのひとり、金剛家初代当主、金剛重光です。

中心伽藍の完成後、ほかの2名は大和と山科に行ったと言われており、重光は聖徳太子の命で四天王寺に残りました。その後、金剛家は長い間、四天王寺のお抱え大工として寺領の工事すべてに携わり、他



四天王寺の建立を命じた聖徳太子

美。宮大工は常に、微に入り細を穿つやり方で、命がけで社寺建築に従事しているのです。

建物は神仏を祀るためのもので信仰対象ではありません。しかし、その前で手を合わせる人を見るたびに、私たちの思いが届いていると感じます。

国宝級の技術を 守るために

金剛組は、後世に残る建物をつくるためにしばしば採算を度外視し、それが経営難の要因となりました。しかし、苦境にあっても職人たちは高い精度を維持して仕事を続けてきました。高松建設株式会社前会長は金剛組の支援を持ちかけられた際、加工場で職人たちの姿勢と技術力に感銘を受け、「この国宝級の技術が絶えるのを、同業者として見過ごすわけにはいかない」と支援に乗り出しました。私も長い間、一般建築に携わっていましたが、金剛組に來ると原点に戻った気がしてホッとします。



幾種もの継手を駆使する

2006年、金剛組は高松建設株式会社の出資を受けて新たなスタートを切りました。必要であれば、新しい技術も導入しています。が、「伝統を守る」という信条は変わることはありません。匠会も、代々伝わる建築技術を次世代へ引き継ぐ責任を自負し、ほんまもん、の職人の育成に心を砕いています。



継手の性能は細やかな加工技術と精度が求められる

に際し、金剛組の債権者会議は穏やかなもので、ほとんどが債権の一部放棄に同意してくれました。これまでの恩を感じてのことでしょうし、それこそ人情を大切にす大阪らしさだと思っています。



金剛組宮大工「匠会」の会長、木内組代表取締役・木内繁男氏

今後も、日本が世界に誇る建築技術で人々に安らぎと心の修養をもたらす、伝統文化の維持に貢献したいと思っています。



刀根社長と宮大工棟梁の木内氏。互いに打てば響く関係である。

1400年の間、受け継がれてきた 建築技術を守り、伝える。

恐慌、戦争を経て 新技術の導入へ

の業者が入りこむ余地などありませんでした。それは、職人たちが現状に甘えることなく、常に命がけで仕事に取り組んでいたからだと思います。

しかし明治元年、「神仏分離令」が発令されると転機を迎えます。他の寺院と同様に、四天王寺も寺領の多くを没収され、金剛家の仕事も激減。そこで初めて、四天王寺の外でも仕事をするようになったのです。記録にはありませんが、当時盛んだった神社建築に携わったのだろうと思います。

昭和以降の金剛組の歩みは、波乱万丈です。昭和恐慌の際は、その煽りを受けて仕事が減り、37代目当主金剛治一は自身の不甲斐なさを感じて、先祖の墓前で自害しました。その後を継いで38代当主となった治一の妻よしえは、1934年、室戸台風で倒壊した五重塔の再興工事の陣頭指揮を執り、女棟梁としての手腕を発揮しました。

しかし、戦火で五重塔が焼失すると、鉄筋コンクリートによる再興が決定。金剛組はコンクリート工法の技術を持っていなかったため、四天王寺の長い歴史の中で初めて、金剛組以外の業者が施工することになりました。それは大事件で、新聞でも大々的に報道されたそうです。

職人は全員、泣いて悔しがりましたが、同時に、新しい工法を取り入れる必要性を感じたのでしょう。「コンクリート工法で金堂を手がけたい」と当主よしえに訴え、よしえ



株式会社金剛組
大阪市天王寺区四天王寺1-14-29
TEL:0120-054-731
www.kongogumi.co.jp

歌でHappinessを届けたい

シンガーソングライター
寺尾仁志氏



700人のシンガーが参加し、Give Happinessを理念にアーティスト活動を行う「human note」。この大所帯のグループを率いる寺尾仁志氏に、活動に込める思いをうかがった。

「human noteはどのような活動をされているのですか。」

学校や病院、被災地、海外などで、歌の持つ力や歌を通して人とつながる素晴らしさを伝えていきます。大切にしているのは、訪問先で何が求められているのかを知り、自分たちがどう応えられるのかを考えること。東日本大震災の被災地、南三陸町の避難所で歌おうとした瞬間、困っている人に手を差し伸べようとしている自分が「いい事をしている自分に酔っているのではないか」と思えて急に怖気づき歌えなくなりました。でも、被災者の方々の気持ちをわかりたいし、ちゃんとつながりたい。そう

願いながら歌うと、ある女性の方が「歌なんか聴く気になれないと思ってたけど、聴けて嬉しかった」と言ってくださり、私も温かい気持ちに

なりました。幸せを届けることは自分たちの喜びになり、その経験は私たちが成長させてくれます。ですからメンバーには「ええことしてる自分に酔うのはやめよう」と言っています。



「Parasports 応援プロジェクト「Beginning」に参加されていますね。」

メンバーの中には障害を持つ人もいますし、支援学校で歌うこともあります。障がいを持つ方は、時に人の力や助けを必要とすることがあるかも知れない。でもまずはお互いに「知る」ということがとても大切だと思っているんです。その私たちに、Parasportsを応援するNPO法人「アダプテッドスポーツ・サポートセンター（ASSC）」さんからコラボの依頼があり、Parasportsの気持ちを高めるような歌で応援することになりました。そんな曲が書けるのは、中西圭三



寺尾仁志プロフィール
1990年代初頭、シンガーとして活動スタート。2002年、それまでのアカペラ、ゴスペルグループでの経験を経てシンガーソングライターとして活動を始め、現在までに4枚のアルバムをリリース。1998年からは、ラジオパーソナリティーとしても活動を始め、ラジオ関西、FM滋賀、FM大阪、FM和歌山で自身の番組を担当する。2007年、human noteを結成。メンバーは700名で構成され、歌を通して人とつながり、ウタの持つ力を持って、日本中・世界中をウタでつなげることをミッションとして、日々歌い続けている。

さんしかない。早速、曲作りをお願いし、誕生したのが「Beginning」です。2020年に向けて、これからASSCさんと一緒にParasportsを応援していきたいと思っています。

「大阪の若い世代へメッセージをお願いします。」

皆さんの夢が誰かのためになるのなら、その夢に向かって歩いて行くことは楽しいはず。私は歌うことに迷っていた時期がありましたが、38歳の時、大人が輝き、仲間とつながり、成長できるグループをつくらうという夢を見つけ、「human note」を結成しました。皆さんもそんな夢をぜひ、見つけてください。



プラス



『ええもん発見！ おもろ大阪コンテスト』

9月2日・3日にうめきた第二地区で行われましたマチミラ OSAKA2017。その会場内で“ええもん発見！おもろ大阪コンテスト”を開催されました。当日はたこ焼きをテーマにして大阪らしさや魅力を発信している4店舗に出展いただき、『ベジたこ』『たこやん』『たこドック』『たこ焼き風春巻き』といったおもろ商品を通じて、新たに大阪の魅力を発信していただきました。またコンテストの審査員として、ET-KINGさん、かりゆし58さん、千原せいじさんなど、マチミラ OSAKA2017のステージ出演者の皆様にアンケートにご協力いただき、見た目とネーミングで圧倒的な投票を得た、大阪の老舗和菓子屋である株式会社三和山本の『たこやん』が最優秀おもろ大阪賞に輝き、コンテストは大盛況のうちに終了いたしました。

株式会社 三和山本

564-0042 大阪府吹田市穂波町13-42

TEL：06-6384-3981

設立 昭和46年11月8日

直営小売店 和・水都饅菓（わ・すいとせんか）



株式会社三和山本について

大阪、京都、神戸などの駅や空港、観光地などへ和洋菓子の製造卸を行っている。グループ会社である株式会社和では、和・水都饅菓の屋号にて和洋菓子の販売を展開。和・水都饅菓の前身である千壽庵吉宗大阪本店は昭和63年に開店 2017年に屋号を和・水都饅菓に改め、コンセプトから商品までフルモデルチェンジ。現在は毎朝焼きたてのどら焼きや季節の旬の様々なフルーツ大福など生和洋菓子を中心に取り揃えている。



編集後記

今年度最後の発行となりましたSencia2017年11月号をお楽しみ頂けましたでしょうか？

この一年間連載して参りました特別企画「温故知新 大大阪時代を歩く」も今回が最終回でした。表紙を飾った秋晴れの大阪城天守閣、現役で稼働する最古の都道府県庁舎である大阪府庁本館、そしてかつて馬場町に存在した旧大阪放送会館(NHK大阪放送局局舎)という、大阪の公の顔を代表する建築物群で本特集を締めくくりました。大阪が本当に大阪らしかったあの時代の活力を再び現代に呼び起こしたい、そういう気持ちで臨んできた取材も終わりを迎え、スタッフも感慨ひとしおです。一方、巻頭対談には再び安藤藤

雄氏をお招きしました。その衰えるところのない建築への情熱と大阪の未来に対する想いは大大阪時代の活力とスピリットに通じるものを感じました。さらに、浪速の名匠で取材した世界最古の企業・金剛組の超高度な職人の技には舌を巻き、そして元祖きつねうどんの店マツバヤのお揚げのまろやかな味には浪華の優しさを実感しました。大阪は本当に素晴らしい財産を持っている世界に誇れる街である。それが今年度の広報誌発行を通じての感想です。

さて、来年度もSenciaは年間6回の発行を目指します。今年一年のご愛読に感謝し、来年もどうぞ引き続きよろしく願い申し上げます。



Junior Chamber International Osaka

一般社団法人 大阪青年会議所

〒552-0007 大阪市港区弁天1-2-30 オーク4番街401号室

TEL 06-6575-5161 FAX 06-6575-5163 www.osaka-jc.or.jp/

スマートフォン版



ULTRA VOTE PROJECT を実施させて頂きました！

「ULTRA VOTE PROJECT とは」

一般社団法人 大阪青年会議所が2016年度から全国に展開している若年層の政治参画向上を目的とした運動です。2017年度は、政治や投票に参画する際の意識や変えてほしい点などが無いが、若年層に向けたアンケート調査を実施して参りました。

7月2日

には、学生企画のファッションショーイベント「キャンパスコレクション 2017」に出展し、若年層に向けて、投票に関するアンケート収集を行わせて頂きました。

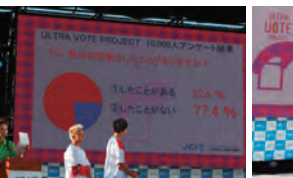


7月18日

には、近畿大学松本ゼミ様にご協力を頂き、グループディスカッションを行い、若者の投票について意見交換を行いました。生徒からは、「改めて投票環境の見直しや、選挙に関わる必要性を感じた」との感想を頂きました。

9月2日
3日

に開催された「マチミラ OSAKA2017」では、本事業の集約発表として市民の皆様に向けてアンケート結果を発表させていただきました。総合司会者の赤松悠実様や、参加して頂いた学生様からは、「若年層特有の課題がある事が分かった。簡単に投票ができる仕組みがあれば、もっと投票率が向上すると皆が思っている事が分かった」とのご意見を頂きました。



本事業では、主に18～21歳の層から多くのアンケートを収集する事が出来ました。9割の方は、選挙年齢が18歳に引き下げられた事を理解しており、また前年度の投票に行かれた方は、投票参加理由として一番多かった回答は国民の義務だからでした。投票に行かなかった理由で一番多かったのは住民票を移しておらず投票できなかった、でした。この質問から他府県から来ている学生が住民票を移しておらず、今住んでいる地域で投票出来ない事が浮き彫りとなりました。そして、投票率を上げる解決策はなにか、という質問に対しては、ネット投票との回答が最も多い事が分かりました。また、政治を身近に感じられれば投票率が上がるのでは、との回答も多く、今まで以上に政治や政策の周知を行うと同時に、投票環境の整備、改善が必要だと思われる結果でした。アンケートに回答して頂いた皆様の7割以上が次回選挙があれば参加しようと思っていたことができ、未来を選択する当事者としての意識を高めていただく機会となりました。

ULTRA VOTE PROJECT アンケート結果

あなたは昨年7月の参議院選挙の投票に行きましたか？

①投票に行った 44.1%
②投票に行かなかった 40.4%
③当時選挙権がなかった 16.4%

投票に行かれた方はどういう気持ちで行われましたか？

①国民の義務だから 35.4%
②政治をよくするために 13.5%
③両親や教師から行くように言われたから 8.7%
④選挙年齢引き下げ後 最初の選挙だから 8.0%

投票に行かなかったのはなぜですか？

①今住んでいる市町村で投票出来ないから 27.4%
②投票にあまり関心がなかったから 23.6%
③投票に行くのが面倒だったから 12.6%
④どの政党や候補者に投票すべきか分からなかったから 7.7%

どうすれば投票に行こうと思えますか？

①より簡単に投票できる仕組みがあれば 30.1%
②選挙の内容を理解できれば 25.2%
③自身に関わる政策や問題があった時 8.5%

より多くの若者の投票率を上げるには何をすれば解決できると思いますか？

①ネット投票 24.2%
②政治を身近に感じられれば 16.0%
③国や自治体による周知がもっとあれば 8.0%

このアンケートを通して次回選挙があれば参加しようと思いましたか？

①とても思った 34.9%
②思った 36.8%
③少し思った 19.2%
④どちらでもない 9.1%

発行

一般社団法人大阪青年会議所

企画制作 onthedesk

Producer/Creative Director

堀之内 博昭

ArtDirector/Designer

オガワヨウヘイ

Writer/Interviewer

堀之内 博昭・いしだかおり・井本 旬子

Photographer

長澤 博幸・渡部 健五